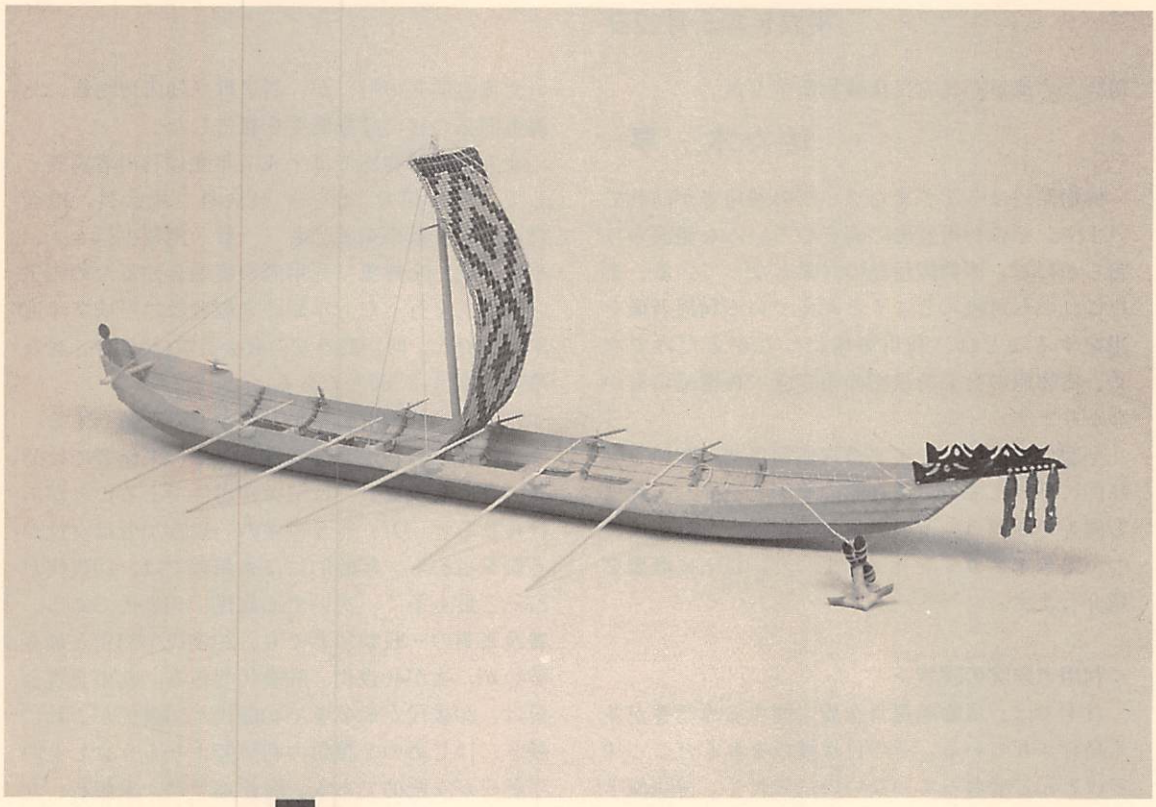
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



板つづり船（イタオマチプ）模型

アイヌ

全長　135cm

北方民族博物館だより
−第22号−

講座「博物館学研究会−ビジタースタディー」　2
平成７年度収集資料紹介　4
博物館クラブなど　5
News　6

「博物館学研究会
ービジタースタディー」

平成８年５月22日

司会：北海道立北方民族博物館学芸員
佐々木　亨

博物館にはさまざまなタイプの利用者が訪れています。その利用者層の姿をいろいろな側面から明らかにし、博物館活動の対象となっている、またこれから対象にしようと考えている利用者像を想定することは、利用者増につながるだけでなく、博物館の社会的役割の再定義・再構築にもつながります。

今回の講座では、まず博物館利用者の実態を実証的に分析している博物館の事例を紹介し、利用者調査の問題点やその結果と博物館の意思形成についてディスカッションしました。以下に概要を紹介します。

＜利用者研究の現状＞

日本では、博物館運営全般に関する専門書が多く発行されている。その目次構成をみるとここ10年ほとんど変わっていないのに気付く。博物館学とその歴史、博物館活動（収集、研究、展示、教育普及事業など）、博物館の種類や設置者および博物館登録、博物館職員（特に学芸員）の資質と養成、博物館関係法令が主な内容である。

一方、1993年にICOM（International Council of Museums・国際博物館会議）が発行した博物館職員向け業務入門書“Museum Basics”（翻訳版：『博物館の基本』（財）日本博物館協会発行1995年）では、大きく次のような内容構成になっている。①ミュージアムとユーザー、②資料収集と管理、③ミュージアム施設、④ミュージアム運営であり、①に全体の半分近いページを費やしている。この状況を一概に比較することはできないが、日本において博物館利用者について多くの紙面を割いた専門書が見あたらないのは事実である。

＜利用者調査の事例報告＞

利用者調査の事例として、当博物館で行った調査を紹介した。また、この講座に参加いただいた村田良介氏（斜里町教育委員会）、平井宏幸氏（北海道開拓の村）が、斜里町立知床博物館、北海道開拓の村の調査概要を報告した。

北方民族博物館では平成７年度に利用者調査として、①来館者、②友の会会員（現会員、旧会員）、③普及事業参加者（一般〈高校生以上〉、小中学生）を対象に利用者の実態を知るためのアンケートを行った。年間の来館者数は平成７年度が43,337人、同年度の友の会会員数は348件、普及事業参加者は366人である。

以下に単純集計結果から主なものを紹介する。

当博物館の利用者の特性として、来館者では63％、友の会現会員では81％が男性であることがあげられる。一方、普及事業の一般参加者は女性が６割を占める。年齢的には来館者では、20歳代が27％と最も多く、次いで30歳代、40歳代である。普及事業の一般参加者でも、20歳代が23％と最も多いが、次が40歳代、50歳代である。友の会現会員は、30歳代が最多層で40歳代と50歳代がこれに続き、はじめの２種類の利用者よりもう少し上の年齢層が支配的である。居住地では、来館者、友の会会員においては半数以上が北海道外の方である。

来館者では53％が「自家用車」による来館であり、「レンタカー」「バイク」など来館者の意志で自由に移動できる交通手段を利用している人が８割以上であり、来館の形態では少人数の来館が94％を占める。来館回数では「初めて」の来館が約９割であり、リピーター（再訪者）は多くないことがわかる。

参加者の今野久代氏（博物館網走監獄）から博物館網走監獄における利用者実態を紹介いただいたが、それによると①年間来館者五十数万人のうち、旅行代理店が企画した団体観光ツアー客が約50％であること、②この比率は年々減少傾向にあることがわかった。現状では、当博物館とは異なる利用者層であるといえる。

次に、来館者に関する特徴的なことをクロス集計結果からいくつかみると、居住地と年齢の関係では、北海道内に住む来館者は40歳代が最も多く

平成７年度 収集資料紹介

平成７年度収集分の実物資料・映像資料について、その概要と主なものをご紹介します。寄贈を受けた資料については、そのつど本紙面に掲載してきましたので、割愛します。

＜実物資料＞

民族別の内訳は、以下のとおりです。

・サミ８点　　・イヌイト17点
・ナーナイ21点　　・コリヤーク27点
・エヴェン１点　　・アイヌ１点
・クワキウトル（北西海岸インディアン）１点

サミの資料は、靴・ベルトや太鼓などでフィンランドで1950年代頃に製作・使用されたものが中心となっています。イヌイトの資料はアザラシ皮製のカヤック１点以外は版画で、生活の様子などを描写したカラフルなリソグラフがほとんどです。ナーナイのものは、昨年夏の特別展で展示したA.P.ドンカーン氏制作の彫刻（精霊をあらわした像など）と同氏らが収集した衣類などで、それぞれの彫刻に込められた意味などもお聞きしています。コリヤークの衣類や儀礼具などは、近年カムチャツカで収集された資料ですが、当館では資料の収蔵数が比較的少ない民族で、貴重なものとなっています。エヴェンの手袋も同時にカムチャツカで収集されたものです。

クワキワトルの
トーテム・ポール

そして、アイヌの板つづり船（イタオマチプ）模型は、釧路アイヌ民芸企業組合によって製作された実寸のほぼ10分の１にあたる長さ135cmで、筵帆（むしろ）や櫂（かい）・錨（いかり）・あか汲みなどがついた精巧なものです。

今回もっとも大きな収集資料が、クワキウトルのトーテム・ポールで、高さが447cmと常設展示室にちょうど収まりました。1972年に開かれたポトラッチを記念して建立されたもので、約20年間屋外にそびえていたこともあり、色や丸みをおびた表面の削り跡とひび割れにも、重みを感じるすばらしいものです。30年以上前に造られたトーテム・ポールは法的に輸出が禁じられているそうですので、現地以外で見ることのできるものとしては、数少ない古い資料といえそうです。

＜映像資料＞

主なものには、「タイガ　ノマド（タイガの遊牧民）」という３巻シリーズの、ヘルシンキ大学の研究グループによって撮影されたエヴェンキの生活記録があります。英語字幕がつけられたバージョンもあり、現代のロシア政府下でのトナカイ飼育や子どもの教育などの問題にも焦点があてられた意欲的な作品です。

中国社会科学院が1950～60年代に撮影した東北部のエヴェンキ、オロチョン、ホジェン（ナーナイ）の映像は、挿入される音楽とやや物語的な展開から、漢民族の視点でノスタルジック調に制作された感がありますが、伝統的な物質文化等をとどめた貴重な作品といえます。

アサバスカ・インディアンの生活や世界観をあらわした「Make Prayers to the Raven（ワタリガラスに祈りを唱える）」シリーズ（５巻）も、アラスカ大学がプロデュースし民族学者が監修している、現実を記録した学術的にも信頼性の高い資料となっています。

（学芸課　齋藤　玲子）

28%を占め、次いで20歳代（26%）、30歳代（22%）であるが、北海道外からの来館者は、20歳代（30%）、30歳代（27%）、40歳代（22%）であり、北海道内からの来館者に比較すると年齢層が若干低いことがわかる。

当博物館を知った媒体については、単純集計からは来館者の47%が「旅行ガイドブック」により当博物館を知り、次いで「友人・知人から聞いて」14%、「博物館の前を通って」12%となっている。これを居住地別にみると北海道外の来館者は「旅行ガイドブック」が62%と圧倒的に高く、次いで「友人・知人から聞いて」9%、「博物館の前を通って」8%である。一方、北海道内の来館者では、「旅行ガイドブック」「友人・知人から聞いて」がともに23%、「博物館の前を通って」が20%であり、この3つにあまり差がない。

斜里町立知床博物館では、開館から15年経った平成6年度に全有料来館者を対象にアンケートを実施した。調査項目としては、性別、年齢、居住地、来館目的、来館形態、博物館を知った媒体、来館回数、印象に残った展示・資料、その他意見である。また北海道開拓の村でも、平成2年夏から翌年夏までの間に3回にわたって、それぞれ300名ずつにアンケート調査を行った。調査項目は性別、年齢、居住地、職業、来館形態、博物館を知った媒体、来館回数、利用交通機関、観覧時間、満足度、その他意見である。

＜ディスカッション＞

利用者調査および来館者実態を報告した後、①アンケートを行う際の技術的な問題について、②利用者調査結果を博物館の意思形成にどのように反映させていくかという問題についてディスカッションを行った。

技術的な問題では、来館者のサンプリング方法やアンケート用紙の渡し方法について議論された。来館者の実態をできるだけ正確に把握するには、基本的に全数調査が望ましいこと。またそれに関連して、用紙の渡し方としてリーフレットにはさんで渡し、帰りに箱に入れてもらう方法や、

特定の時間や順番に来た来館者1人1人に用紙を手渡して趣旨を説明し、記入してもらう方法がある。しかし後者の方法は人手がかかるものであり、どの方法を採用するかは予算の問題であるとともに、来館者の全体的傾向を知りたいのか、それとも曜日での特性や季節性を見出したいのかなど、何を知りたいのかによるのではないかという意見が出された。

調査結果の反映の仕方については、まずアンケートに記入する利用者の側からすると、記入した内容がどう反映されるかということが気になるとの意見が出された。これに対し、施設面についての要望は比較的実現されやすいが、活動内容に関することは、博物館学レベルの議論をするという手続きが必要なので、なかなかすぐには実現できないことが多い。さらにその議論も学芸員間だけでいいのではなく、博物館職員全体というレベルまで広げなければならないという意見があった。当博物館を含め、いままで利用者調査を行ってきた博物館では、調査結果がまとまったことで館内で議論するためのスタートラインにようやく立つことができたとする意見が多かった。

また、アンケート結果に博物館運営のすべてを語らせることがいいのかどうか疑問であるとの声もあった。つまり、利用者という外部の意見を聞くとともに、学芸課だけでなく管理的な部署を含めて内部の職員が自ら問題意識を持って運営上の課題を抽出し、博物館活動全体を考えていくことが重要であるとの考えである。

当博物館を含め今回事例を紹介した3館の利用者調査の位置づけは、今まで把握していなかった利用者の実態を知るためのものでした。今後はこの分析結果をもとに、事業の方向性に関するいくつかの「仮説」をたて、それを検証するための調査も必要となってくると考えます。

今回話し合われた多くの課題や問題点の中からいくつかピックアップし、さらに深く議論していきたいと思います。

博物館クラブ

博物館クラブは、小中学生のみなさん（クラブ員）が、北方民族の生活の知恵や技術を体験する場です。平成８年度は11回を予定しています。

第１回「オリエンテーションと楽しい切り絵」

４月27日（土）

第１回目の博物館クラブでは、簡単に今後の予定を説明したあと、１年間のプリントを綴るテキストバインダーを作りました。テキストバインダーの表紙には、ウイルタの文様・イルガを切り、貼り付けました。８枚にも重なった紙に、型紙をなぞって線を書き、ずれないようにしっかり押さえながら切っていきます。

このウイルタ文様のもとの形は、資料館ジャッカ・ドフニの館長北川アイ子氏が作られたものです。ウイルタの人びとは、型紙などは使わず、頭の中で形をえがきながら直接切っていきます。ウイルタ文様は白樺樹皮製容器や衣服にみることができます。

内側にカーブした部分を切り取るのに苦労し、きれいに貼るのも大変だったようですが、それでも皆できあがったテキストバインダーに満足し、早速プリントを綴っていました。

第２回「とんぼ玉をつくる」　５月25日（土）

とんぼ玉はガラス製の玉のことで、アイヌの首飾りやウイルタの腕飾りなどに使われています。さまざまな色のものがあり、模様が入っていたり、形がみかんの房のようになっているものもあります。

ガラス棒をガスバーナーであぶって溶かし、これを鉄芯に巻きつけて作ります。欲張って大きな玉を作ろうとして失敗したり、なかなか丸い形にならなかったクラブ員もいましたが、思っていたよりも簡単にガラス細工を楽しめたようです。

第３回「発掘体験」

６月22日（土）、23日（日）

北方民族博物館では６月18日から７月４日まで、網走市の能取岬西岸遺跡での発掘調査を行いました。これにあわせて、博物館クラブの発掘体験を開催しました。

残念ながら、この日は土器片が数点発掘されただけでしたが、クラブ員は発掘を体験するのは皆はじめてということで、土器片が発掘されると、発掘したクラブ員を取り囲んで興味深そうに土器片に見入っていました。発掘した土器は次回の博物館クラブで拓本をとる予定です。

第11回特別展

たばこと民族文化ーたばこが北方に伝わるまでー

７月13日（土）ー９月22日（日）
当館特別展示室（有料です）

北方地域における嗜好品はあまり種類が多くありませんが、その中の一つがたばこです。たばこが北方諸民族に紹介されるや、急速に広く受け入れられていきました。本展示では、北方諸民族の文化に少なからず影響を与えた外来文化の一つであるたばこをテーマに、歴史や利用方法、嗜好品の意味などを探ります。

News

開館時間変更のお知らせ

7月16日（火）～9月15日（日）の開館時間は9：30－17：30です。この期間の他は9：30－16：30です。1時間長くなっています。

学芸員実習

北方民族博物館では、次の日程で学芸員実習を行います。詳細についてはお問い合せください。

日程：平成9年1月28日（火）から
　　2月2日（日）まで6日間
対象：学芸員資格を得ようとする者
申込期日：平成8年8月31日まで
担当：学芸課　渡部　裕

執筆者から贈呈を受けた書籍（4月－6月）

風間伸次郎　1996　『ウルチャ口承文芸原文集1』　鳥取大学教育学部

風間伸次郎　1996　『ナーナイの民話と伝説2』　鳥取大学教育学部

風間伸次郎　1996　『オロチ語基礎資料』　鳥取大学教育学部

主な来館者

6/22　坂井秀弥氏（文化庁文化財調査官）

トーテム・ポールの設置
（P4参照）

その他の行事

5月5日（日）こどもクラフト工房

こどもクラフト工房は今回で3回目になります。雪もちらつく寒い日であったせいか、屋内でゴールデンウィークを楽しもうという親子づれでにぎわいました。

7月から9月の行事

7月13日（土）－9月22日（日）第11回特別展「たばこと民族文化－たばこが北方に伝わるまで－」

7月13日（土）博物館クラブ「土器に親しもう」

7月28日（日）講演会「たばこの文化史」

8月9日（金）博物館クラブ「インディアンのペーパークラフト」

9月14日（土）講座「教師のための北方文化研修会」

9月15日（日）講習会「フィールドワークin天都山」

9月28日（土）博物館クラブ「ナーナイ風ペンスタンドづくり」

体験学習

修学旅行などの団体向け体験学習メニューを用意しています。詳細についてはお問い合せください。

担当：学芸課　青柳　文吉

ＦＡＸ情報サービス

ＦＡＸ情報サービス（24時間）をしています。ポーリング機能のあるＦＡＸでご利用ください。博物館の行事や休館日などをお知らせします。ＦＡＸ番号は0152－45－3889です。

観覧者動向　4月～6月

	常設展示
4月	932名
5月	3,670名
6月	4,332名

編集後記

7月になっても、なかなか気温があがらない網走です。

今年の発掘調査はこの「だより」を入稿する日に、終了します。オホーツク海からの冷たい風をまともに受ける能取岬。「いつになく作業に適した」ではなく、「いつになく寒さに震える」毎日だったようです。　（佐々木）

北方民族博物館だより
— 第　22　号 —
1996年7月25日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093　北海道網走市字潮見313-1
ＴＥＬ　0152-45-3888　ＦＡＸ　0152-45-3889